

日本独文学会 2021 春季研究発表会報告書
「アヴァンギャルドの運動表象」

報告者 横田さやか

日本独文学会 2021 春季研究発表会シンポジウム概要

第1日 2021年6月5日(土)14:30-17:30 オンライン開催
「アヴァンギャルドの運動表象」

プログラム:

未来派の「速さ」をめぐる運動表象について	和田忠彦(東京外国語大学)
表現主義の運動美学	西岡あかね(東京外国語大学)
表現舞踊における「動き」の概念	山口庸子(名古屋大学)
バウハウス舞台芸術工房における「運動表象」の法則化	柴田隆子(専修大学)
ダダと表現舞踊の「あいだ」ーゾフィー・トイバーの運動表象	小松原由理(上智大学)

シンポジウム報告

日本独文学会春季研究発表会にて、シンポジウム「アヴァンギャルドの運動表象」が行われ、本研究グループ「歴史的アヴァンギャルドの作品と芸術実践におけるジェンダーをめぐる言説と表象の研究」から4名の研究者が登壇した。以下にその報告をまとめる。

本シンポジウムは、ヨーロッパの歴史的アヴァンギャルドの諸潮流を跨ぐ〈動き〉や〈速さ〉の表象を描きだすことを目的とした。その成果として、アヴァンギャルドの中核的原理に〈運動表象〉を捉え、文学、美術、舞台芸術などジャンル横断的な考察を実現したといえる。全5本の研究発表が異なる視点から〈運動〉に照射する多角的な構成をとり、まずドイツ語圏の現象をめぐる発表に先立ち、アヴァンギャルドの地鳴りの震源地であり、諸潮流の触媒となったイタリア未来派を突破口とした。

和田氏は、国家統一運動から未来派、ファシズム政権へと激動するイタリアの近代化を背景に捉え、〈速さ〉の感覚変容と絵画、映画、写真にみられるその表象に光を当てた。同時に、広くはヨーロッパの歴史的アヴァンギャルドを再考する前提として、ただし本シンポジウムにおいてはドイツ語圏の前衛諸潮流を俎上に乗せるにあたり、イタリア未来派という現象が議論の立脚地となりうる特徴が示された。すなわち未来派とは、単数形の運動ではなく複数形で捉えるべき多様性を含む現象であったのであり、この視点を共有し議論が開かれた。感覚変容をめぐる西岡氏による考察は、ドイツ表現主義がいかにか詩的言語を生成してみせたかを定点観測のアプローチで例証した。動きを伴う人物表現やヴァイタリズムなどが現れるテキスト引用を通して、芸術家の視点が複数化し、そこには受容者の精神をも動かす言葉の力動化も見られることが明らかにされた。こうした言葉に現れた〈流動〉についての指摘は、舞踊をめぐる山口氏の考察へと引き継がれた。その着眼点のうち、ひとつの標石となるのは、表現主義が多用した言葉でもある〈動き〉とは身体の内にある魂のそれをも含み、表現舞踊においては、ヴィグマンの概念が事例に示されたように、〈醜〉の美学に特徴付けられる点だろう。一方、バウハウス舞台芸術工房における〈動き〉をめぐる柴田氏が体系的に示したのは、人間の形態を三次元の舞台空間に分析することで運動表象を法則化したシュレンマーによる実践である。さらにこの運動表象については、もうひとつの標石といえる、外在化しない運動の可視化が指摘された。つまり有機的法則と空間の数学的法則との連関の先にある、身体に内在する不可視であるはずの運動の可視化が実現されている。そして、こうした〈動き〉の表象の諸傾向が必ずしも各芸術運動や主義、傾向ごとに分断され得ないことが、ダダと表現舞踊のはざまにトイバーによる仮面をつけた踊る身体の実例を考察する小松原氏の発表で例証された。シンポジウムの最終発表となる考察を通して、アヴァンギャルドの運動表象をめぐる議論の今後の展望が示された。ひとつは、仮面に拘束された身体の内には潜む動きを魔術的な〈振動〉とするバルの解釈を挙げ、それ自体がジェンダーのバイアスを含んではまいかという問い、さらには、トイバーがダダという言葉の外側にいるという周縁へ向けられた視点である。つまり、本共同研究が共通課題として掲げた、芸術の理論の創造者と実践の行為者のジェンダー化についての問いであり、さらに、アヴァンギャルドを多角的に眺め直す意義の再確認である。全体の議論を経て、アヴァンギャルドの流動のうちに、〈動き〉をめぐる複数の不定の現象に光が当てられた。例えば、未来主義的な思想や芸術理論の対極に伝統的芸術様式が在るのではなく、近代化に猪突猛進する姿勢に対する疑心が表現主義であったように、前衛対非-前衛の二項式ではない。むしろ前衛それ自体の多様性に立脚し、未来派、表現主義、バウハウス、ダダを事例として、その一面一面の振動が伝播することで生成されていく多面的な歴史的アヴァンギャルドの芸術創造を改めて問い直すシンポジウムであった。